

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名 金 弘來 キム ホンレ

本論文は、『源氏物語』における人物造型の方法を、中国文学も含めたさまざまな先行話型との関わりから分析したものであり、第一部「光源氏物語と話型」、第二部「紫上物語と継子譚」、第三部「源氏物語の人物と話型」の三部に分かたれた十章で構成されている。

第一部第一章「光源氏物語試論」は、光源氏は世の常の色好みではないとする帚木巻頭の語りについて、「登徒子好色賦」(『文選』)の宋玉像や『伊勢物語』の昔男像の継承を指摘しつつ、光源氏独自の色好みのあり方が定位されていることを論ずる。第二章「光源氏の執着と玉鬘の変貌」は、光源氏と玉鬘の物語を『竹取物語』や『うつほ物語』の求婚譚と比較し、そうした先行物語をはるかに凌ぐ襞深い物語になっていることを論ずる。第三章「色好み」の罪意識と恥意識」は、道心と愛執が緊張的に抱き合わされた「色好み」光源氏固有の求道者像を浮かび上がらせている。

第二部第一章「紫上物語における継子譚的話型の再検討」は、紫上物語が『落窪物語』のような継子譚の話型を襲いつつ、女主人公の幸福な結末に終わらないまったく新たな物語となっていることを論ずる。第二章「玉鬘物語における紫上」は、玉鬘に深く心惹かれながらもその情念を自制してゆく光源氏の稀有なあり方に、紫上の超越的な位相が関与していることを指摘する。第三章「紫上の「母性」」は、明石の中宮の養母ではあっても自身の実子を持たない紫上の不安定な位境を分析しつつ、紫上の物語がやはり継子譚のハッピーエンドの類型を破る独自の展開を見せていることを論ずる。

第三部第一章「桐壺更衣物語の悲劇の構図」は、桐壺更衣の準拠として従来「長恨歌」の楊貴妃や『漢書』外戚伝の李夫人が準拠とされてきたことに再検討を加え、桐壺更衣は楊貴妃や李夫人のようなしたたかな中国後宮女性像とはまったく異なる造型がなされており、それだけに帝と更衣の物語は悲恋の物語として純化されていると論ずる。第二章「光源氏物語の発端と「心の闇」」は、桐壺更衣の母親の「心の闇」に政治の論理とは無縁な純粋な母としての悲しみを看取して、第一章の論旨を補強する。第三章「浮舟物語の薫と匂宮」は、一人の女性を二人の男性が争うという処女塚伝説の話型と浮舟物語を比較し、後者における二人の男性薫と匂宮が前者の話型とは大きく異なっていることを分析する。第四章「浮舟物語と処女塚伝説」は、浮舟が入水を決意するに至る過程を丹念に読み解くことを通して、やはり処女塚伝説の話型を大きく踏み越えた物語になっていることを論ずる。

じゅうぶんに論が精練されていない箇所も散見するが、『源氏物語』が先行のさまざまな話型によって人物像とプロットを構想しつつ、いかにそこから飛躍した独自の文学的達成を遂げているかということを明らかにした労作であり、また『源氏物語』の龐大な先行研究だけでなく、関連する漢文学や日本史学等の研究にも実に丹念に目配りしている。よって審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。